

# 記憶の文化政治学：ベルファストとベルリンにおけるスポーツ・空間・記憶

アラン・ベアナー（ラフバラ大学）

## 導入

「我々が見ているものとは、我々が〔実際に〕見ているもののことではなく、  
我々が誰なのかということである」

(Fernando Pessoa, *The Book of Disquiet*, p.371)

### <1>

Yeal Zerubavel (1994:118)によれば、「歴史」と「伝説」の文化的相互作用に関する研究によって、集合的記憶が可変的だという特徴と、過去を闘争のアリーナへと変えるような対立する見方の変化のしやすさが明らかになった」。記憶を思い出すために空間を利用することは、他のどんな話題よりも精力的に討論されてきたし、特別に困難な歴史を持つ社会ほどそれがはっきりしているものはない。本稿では、ベルファスト〔北アイルランドの首都〕とベルリンという2つの都市における社会的空間の記念碑化を取り巻く文化政治学について論じたい。特に本稿では、スポーツ空間が記憶の政治の中に巻き込まれていく過程を考える。その中でも、ベルファストの郊外に位置するメイズ刑務所跡地（もしくは、その収容所として知られるロング・ケッシュ）<sup>1</sup>によって明らかに占拠された、**International Conflict Transformation Centre**〔以下、ICTC〕の脇にある北アイルランドの新たな“ナショナル”スタジアムの建設問題に焦点を当てる。本稿では、物理的対立が終了して長く経った後、集合的記憶を作りまた再生産するために、記憶と空間が争われ続けるのだということをも主張する。

### <2>

Yi-Fu Tuan(1977:3)によると、「空間と場所は生活世界の基本的構成物であり、我々はそれを当然のものと認識している」。それによれば、空間はある意味唯一自然的なものであり、Henri Lefebvre(1991:77)も「社会空間は、自然なものも社会的なものも含めて極めて多様な物事を内包しており、そこには物質的な物事や情報の交換を容易にするようなネットワークや経路も含まれている」と述べている。「都市は、意味合いの中心で、それぞれに素晴らしいさを持っている一つの空間である」(Tuan,1977:173)つまり、それ自体が一つの象徴であり、高度に可視的な多くの象徴が存在する場所なのである、というのは、このことと関連する。よって、驚くべきことではないが、都市のような社会空間は記憶やアイデンティティの創出や再生産のために非常に重要なのである。加えて、これらの社会空間の中で、スポーツの場所及び景色は、集合的記憶の入れ物としてのみではなく、アイデンティティの形成と強化において重要な役割を果たす(Bale and Vertinsky,2004)。

### <3>

Huysen(2003:11)は、以下のように主張する。「近年もっとも驚くべき文化的政治的現象のうちの一つは、記憶が西欧世界において鍵となる文化的政治的関心を呼んでいるという

<sup>1</sup> Her Majesty's [HM] Prison Maze 北アイルランド紛争時、民兵組織の囚人が収容された。2000年に閉鎖、2006年に撤去された。

ことである。つまり、20世紀の最初の数十年間における近代性に特徴的なように未来を特権化していたのとは全く正反対な過去に目を向けているということである」。記憶それ自体は社会的活動として理解される。なぜなら「精神は、社会の圧力の下で記憶を再構築する」(Halbwachs,1992,p.51)からである。Johnson(2002:294)によると、「社会的記憶の概念は、特定の歴史や地理との感情的・イデオロギー的つながりの発達とリンクしてきた」。Hoelscher and Alderman(2004:348)が主張するように、「社会的記憶と社会的空間が結合することで、近代アイデンティティの文脈と、しばしばそれらのアイデンティティによる激しい対立が生み出される」。対立の中の一つの特定の局面とは、公共空間の利用と、記憶の喚起のメカニズムとしての記念碑の建設である。実際、公共空間という概念それ自体が議論を引き起こす。Doreen Massey(2005:159)によると、「多様性、対立、一時的闘争は、どの場所にも存在する要素である」。よって、Lefebvre(1991:226)が主張するように、社会空間の分析は「知覚・表現・お互いを想定した空間的实践における複数のレベルや層、沈殿を含んでおり、それらはお互い自らに申し出、またお互いに重ねていくものである」。Massey(2005:152)によれば、公共空間は「大きな公共広場から小さな公共公園まで、これらの場所は、異種の、そしてしばしば対立する社会的アイデンティティ・社会的関係によって作られたものであり、またそれらによって本質的に混乱したものである」(p.152)。しかしながら、それらが紛争や意義を巻き起こす可能性があるにもかかわらず、もしくはおそらくそのために、政治家や政策決定者たちはしばしば、特に記憶の記念碑化のためにこうした公共空間をいじろうとする。Connerton(1989:3)がコメントしているように、「社会的記憶について言うなら、過去に関するイメージは一般的に現在の社会秩序を正当化しているといえるだろう」。1990年代のベイルート<sup>2</sup>の再建が、この例として挙げられるだろう。Nagel(2002:718)によると、その過程は「物理的インフラの再整備というだけでなく、同じくらいレバノンの無秩序だった過去—そして、実際、レバノンの“国民”に対して新しい集合的記憶を創ることとして—表現できる」。レバノンのみでなく、対立や社会的分裂が起こった後のその他の地域において、これらの努力の成否は、当然集合的記憶がカバーしている範囲にかかっている。過去や現在（そして未来）対立が起こっている場合、これは容易な問題ではない。

#### <4>

Leib(2002:289)が述べたように、「イデオロギー的に風景をコントロールする明らかな権力が存在する場所には、公共空間の中に、過去を記念するような公共の記念碑が設置されている」。彼の故郷であるバージニア州リッチモンドで起こった、アフリカンアメリカンのテニスターであり人権活動家のアーサー・アッシュの像をどこに設置するかの討論は、その典型例である(Leib,2002)。このとき、様々な事情があったにもかかわらずそれに反対して団結したのは、南部連合のロバート E. リー将軍の記念碑の近くにある記念碑通りに像を建設することに反対した、伝統的南部白人とアフリカンアメリカンの活動家たちだった。Leib(2002:307)が記しているように、「アッシュを巡る議論の激しさは、社会における象徴

<sup>2</sup> レバノン（首都ベイルート）は、1990年に内戦が勃発、これに介入したシリアの主導により国家再建が進められた。

的表現と風景の重要性を示している」。アメリカのある都市の通りに、マルティン・ルーサー・キング・ジュニアに敬意を表した名前を付けるかどうかの討論でも、似たようなことが起きている(Alderman,2005)。しかし、空間と記憶の関係性に関する討論は、ベルリンほど活発なところは他にない。

<5>

### 統合以前のベルリンにおける空間・記憶・モニュメント

Huysen(2003:31)によると、1995 年以來、ドイツは「激しい記念碑論争」に包まれている。その論争は「博愛による理想の世界ではなく、破壊と殺戮によって構成される現実世界を記念するような、独自の記念碑や記念地が各都市に建設されるまで続いた」。Koonz(1994:260)が厳しく表現したように、正しくは「ドイツ人たちが記念碑を建設し、強制収容所博物館を作るとき、彼らは、彼らの祖父母や父母の時代の政府の被害者を追悼しているのである」。この事実は、第二次世界大戦後の時代において、ベルリンにとって記念碑というものが新しいものだということを示すわけではない。例えば、ブランデンブルグ門<sup>3</sup>とノイエヴァッヘ<sup>4</sup>の両者は、国家社会主義の台頭よりも早く作られたものである。だが、それらに付与された意味は、20 世紀におけるドイツの歴史の移り変わりを間違いなく反映しているということは、特筆されるべきである。ノイエヴァッヘは、国民戦争の記念碑から、ナチのヒーローにとっての神聖な場所、アンチファシストを記念する地、そして最後には“2 つの世界大戦と 2 人の独裁者”の死を記念するドイツ統合後の記念地へと変わっていった。それについて Till(1999:275)は以下のように述べる。「ノイエヴァッヘのような公共記念地は、歴史的物語や公的な文化政治学、地方の利害関係、メディアの表象、利害団体の代表者、そして文化的産物の相互作用を通じてその意味を獲得していく」。これは、1945 年以降のベルリンの記念碑化を巡る議論においても、同様に明白である。

<6>

一つの論点は、ナチスを打倒するための闘争における Kommunismus が果たした役割と、より一般的な Kommunismus の地位についてである。巷では、未だにカール・マルクスやローザ・ルクセンブルグなどの名前が発せられている。マルクスとフリードリヒ・エンゲルスの像は都市の中心に程近い場所に立ち、プレントラウアーベルク地区の東に少し行った所には、エルンスト・テールマンの記念碑がある。テールマンはワイマール時代の大部分におけるドイツ共産党の指導者であり、1933 年に逮捕されて独房に閉じ込められ、その後 1944 年にナチのブーヘンヴァルト強制収容所<sup>5</sup>に送られた。多くの人にとって過去に対する風変わりな反応は、より東にあるトレップタワー公園内のソヴィエト戦争記念館<sup>6</sup>に存在する。表面上は、1945 年の 4 月から 5 月の間にベルリンで行なわれた戦いで戦死した

<sup>3</sup> ブランデンブルグ門：ベルリンの象徴的な門。東西ドイツ時代は東に属した。

<sup>4</sup> ノイエヴァッヘ：ベルリンのウンターデンリンデン通りに、1816 年衛兵所として設計され、1993 年政府の中央追悼施設となった。

<sup>5</sup> ブーヘンヴァルト：ドイツ・ワイマール近くにあった強制収容所。絶滅収容所ではないが、死亡者数は 56,000 人以上であった。

<sup>6</sup> ソヴィエト戦争記念館：ベルリンの南部にある戦争記念館と亡くなった兵士の墓地。東ドイツの中心的な戦争記念施設であった。

80,000 人のうち 5,000 人のソヴィエト兵を祀ったものであるが、この複合施設はスターリンへの感謝の証として容易に読み取れる。スターリンの言葉はドイツ語とロシア語によって記録され、ナチズムによる苦痛から解放されたドイツ人の子どもを腕に抱く赤軍兵士<sup>7</sup>の像へと続く歩道の両側にある、石のオベリスクの上にある。過去を思い出すことによるジレンマとは、以下のようなものである。近代のドイツ人が国家社会主義に価値を見出す一方で、ナチズムの敗北と、 Kommunismus の勝利とその後の東ドイツに対するソヴィエトの影響を結びつけて考えようとする事は、後期資本主義と中産階級主導の民主化に中心的価値を置くような、新たに統合されたドイツの集合的ナショナルアイデンティティを構築するのに、恐らくほとんど貢献しない。

<7>

Till(2005:5)によると、「“新たなベルリン” は、ドイツの将来への保証を表現している」。しかし、Ladd(1998:235) が述べるように、「建物や記念碑はベルリンの過去における傷を示すことができるだろうが、それらを癒したり、ましてや隠したりすることはできない」。実際、ナチのリーダーシップにもっとも直接的に関わっている都市の地域の場合、恐怖政治の地政学は意識的に公開された痛み、「国家社会主義の歴史に立ち向かい記録する犯罪者の歴史的な場」としてそのまま放置されている。しかし、「活動家、教育者、管理者がポスト国家的未来を想像できるような場所」(Till,2005:105)でもある。スケールという点でも、恐らく野心という点でも、より記念的なのは、ピーター・エイゼンマンによって設計された欧州のユダヤ人大虐殺犠牲者ための記念碑<sup>8</sup>と、ダニエル・リベスキンドのユダヤ記念館<sup>9</sup>である。それらは、Howard Jacobson(2007:2)がコメントしているような、「ホロコーストを思い出すことは、メタファーと詩に満ちた行為である」ことを反映している。過去の強制収容所をリストに挙げる事ほど、記憶の原因がはっきりしているものはない。ベルリンの場合、特徴的な例がザクセンハウゼン[強制収容所]である。それに関する議論は、Till(2005:206)によると、「東西ドイツの歴史と、設計家や政治家、歴史保存家、芸術家、建築家、国際的・国家的に生き残った集団、そして両ドイツから来た地方の住民による記憶文化を学ぶことを必要とする」。同じような必要性は、その他の過去の収容所、特にブーヘンヴァルトとの関係でも現われる。そこには、単にテールマンの「苦難」の場所としてのみではなく、ドイツ民主共和国[旧東ドイツ]による共産主義のリーダーシップの重要性を明らかに象徴している。一方で、再統合にあたり、集合意識との関連で収容所をこれまでとは違う形で位置づけて欲しいという新ドイツ政府に対する要望もあった。Azaryahu(2003:16)が記しているように、「ブーヘンヴァルト記念地を“再び方向付ける”のを完了するのに 10 年ほどかかったことは、信頼されていない東ドイツの国立聖堂を、歴史的により健全でより精神的に正式な記念地として正式に受け入れられるものへと変えるよう、記憶を置き換える過程が伸びたということだ」。強制収容所と結びついた遺産産業

<sup>7</sup> 赤軍、1918-45 年のソ連陸軍の公式名称。

<sup>8</sup> 欧州のユダヤ人大虐殺犠牲者ための記念碑:「ホロコースト記念碑」で有名。2005 年に開園。ブランデンブルグ門の南。

<sup>9</sup> ユダヤ記念館:2001 年に開園した、統一後に作られた建物の一つ。

は特に北アイルランドと関連しているが、その関係性を詳しく述べる前に、ベルリンの文脈の中でのスポーツ空間と記憶の関係性を考えることに、意味があるだろう。

## ベルリンにおけるスポーツと記憶：ベルリンオリンピックにおける場

<8>

1FC ユニオン・ベルリンのホームグラウンドであるアルテ・フェルステレイを訪れることで、東ベルリンにおける外縁の産業的風景を見ることができ、スポーツ・空間・記憶の融合がもっとも明確だと考えられているのは、市の西側にあるオリンピックスタジアムである。実際、オリンピックグラウンドは、ベルリンの集合的記憶を構成するものとして描写されている(Tietz,2006)。ワーナー・マーチによって1930年代に設計され、スタジアムそれ自体に加えて鐘楼やメイフェルト、ランゲマルクホールから成る。1936年の夏季オリンピックをベルリンで開催するために、マーチの父であるオットーが設計した既存の地域を中心としてスタジアムの建設計画は進行中だったが、ナチの1933年の政権奪取によって、スタイルと野望の両方における近代化が必要となった。Tietz(2006:14)がそれを描写し、以下のように述べている。「スタジアムの再建は、イデオロギー的に、ナチの支配体制における新古典主義派の記念碑的建造物となるということであった」。この問題の最も重要だった点は、ランゲマルクホールが、第一次大戦で戦死したドイツ人兵士を祀るものだったということである(Breymayer and Ulrich,2006)。スタジアムの設計に対してアドルフ・ヒトラーの影響が及ぶことに対する反対も多くあった。大きな石柱とタワーには、同じくらい記念的な彫刻が併設された。それは、ジョセフ・ワッカーレによる「赤い総統」と、カール・アルピカーによる「円盤投げの選手」で、それは「驚くほど飾るところがなく、たくましく、均整の取れたものであった」(Tietz,2006:17)。後者は恐らく、この地でもっとも明快なナチ式形式を持つものである(Add,1997:143)。人はなんらかを加えたいが、これらの彫刻は、ストックホルムオリンピックスタジアムのグラウンドに建てられた彫刻とほとんど変わらない。ストックホルムオリンピックスタジアムは、1912年夏季大会に向けて建設され、「ジムナスティック - och idrottshogskola」の近くにあり、充分成熟したナチイデオロギーに対抗する身体文化に対する一般的なユージェントシュティールアプローチ<sup>10</sup>を用いている(Nielsen,2005 参照)。

<9>

Ladd(1997:143)が分析したように、ベルリンスタジアムは「建築に関するすべての決定は、ナチスによる1936年オリンピックの象徴的利用(もしくは誤用)に関する知を通過したものであった」。そのため、ヒトラーの権力獲得と親密に結びついた記念地が、いまや先ほど議論したその他の記念碑と比べてイデオロギー的力がはるかに少ないことは、皮肉な話である。必然的に、スタジアムの将来に関する議論が、何が思い出されるべきで何が思い出されるべきでないかについての関心や、記念地が維持されるべきかもしくはどうやって維持されるかについての関心に埋め尽くされている(Tietz,2006)。ついには、ブンデスリ

<sup>10</sup> ユージェントシュティール：アールヌーボーのドイツ版。

ーガ [ドイツのプロサッカーリーグ] のクラブであるヘルタ BSC のホームとなり、そのスタジアムは 2000 年のオリンピックをベルリンで開催しようとして失敗した計画の中心にあり、1974 年の W 杯の間用いられ、大規模修繕の後に、2006 年大会の決勝で再び使用された。アーリアニズムの野心的な幻想よりも、スポーツ全般やフットボールの商業化のほうがより重要だと言える。その意味で、そのスタジアムはその他のスタジアム建設者にモデルを提供したことになる。それは単に、複数のプラットホームを持った隣接した鉄道駅によって人々の輸送が楽になったという意味だけではない。しかし、北アイルランドにおける新たなスタジアムを建設しようという計画について考える前に、ベルファストとその近郊における空間と記憶の一般的な関係について考えてみたい。

## 現在のベルファストにおける空間・記憶・記念碑

### <10>

空間とアイルランドアイデンティティの関係については、地方と田園風景の関係によって広く議論されている(Smyth,2001)。しかしながら、Cuttin et al(1993:14)が指摘するように、「アイルランドの農村地域における空間、権力、歴史、記憶の文脈は、人々が地方の環境における不安に適用しようとする方法と密接に関係している」。たとえばダブリンでは、「文化的風景は権力と抵抗を象徴するような場所として機能するようになった」(Whelan,2003:5)。記念碑や通りの名前は、ベルファストらしさを表現する役割を果たしている。詩人であり、このベルファストの都市風景の編年史家であるキーラン・カーソンの言葉によれば、「すべての丘には、メッセージ、のろいの言葉、政治的命令が付けられ、消され、また付けられている。しかし、多くの名前、もしくはロボ、マッカーズ、スコット、フラといったニックネームは、すべてのレンガの壁の上に強制的に付けられていることもある。壁は手が届きそうな高さか、それより高いこともあり、ヘビとはしごは、人に思い出してもらおうとする企てをお互いに打ち消しあっている」(Carson,1989:52)。

### <11>

アイルランドは、全体として都市のモニュメントや記念碑に満ちており、それは第一次世界大戦での戦死者を追悼するためのものだけではない(Jeffery,2000)。戦争を記念する公式な行動や記念地に加え、第一次世界大戦、特にソム川の戦いの記憶が、アルスターロイヤリズム<sup>11</sup>のイデオロギーとそれを支持する彫像に刷り込まれている(Graham and Shirlow,2002)。アイデンティティを披露することが大きな重要性を持ち(Jarman,1997)、小説家である Eoin McNamee の言葉を借りれば「レンガ、雨、記憶の織物」(McNamee,1994)であって都市の風景が刻み込まれている社会において、ソムは民兵の記念碑及び壁画として、「アイデンティティ人工物」(Graham and Shirlow,2002:893)となった。Shirlow and Murtagh(2006:15)が記しているように、「ベルファストでは、EU における多くの分断され

<sup>11</sup> アルスターロイヤリズム：アルスターは、アイルランド島は 4 つの地方 (Province) の一つ。連合王国である北アイルランドにはアルスターの 6 県 (County) が属する。残りの 3 県はアイルランド共和国となる。ロイヤリズム：北アイルランドにおいて、連合王国への統一の維持を望む人々で、ユニオニストも同様だが、ロイヤリストは過激派を指すことが多い。

た都市とは異なり、もっとも重要で広く認知されている空間的分化は、単に階級や人種によるのみではなく、ナショナルアイデンティティによるものである」。特定の生活区域において一般的な集合的記憶を作るためにもっとも有効なメカニズムは、社会空間を記念碑化することである。

#### <12>

都市の記念碑の中には、公的な目的を果たすために作られたものもある。例えば人は、ベルファスト市民ホールのグラウンドにある、記憶と記念碑の庭を思い出すだろう。そこでは、1912年に沈んだタイタニック号の犠牲者の記念碑と、第二次世界大戦において北アイルランドで唯一ヴィクトリアクロス<sup>12</sup>を受け取ったジェームス・マゲニスの記念碑を目にすることができる。しかしながら、主要な共和国主義者や民兵組織の死者の記念碑がより一般的には思い出されるだろう。特に前者は、ケースメントパークの近所にある西ベルファストの、フォールズ通りとアンダーソンズタウン通りの交差点にあり、1981年にロング・ケッシュで亡くなった、共和国主義者のハンガーストライキを行なった人の記念碑である。そう遠くない所にはアンダーソンズタウン広場があり、そこにはIRA（アイルランド共和軍）ベルファスト旅団の第一師団で亡くなった志願兵や、ユナイテッドアイリッシュマン<sup>13</sup>、そして大飢饉<sup>14</sup>（「ファミン」としてよりよく知られている）の犠牲者の記念碑がある。市の中心から少し歩いた所にあるロウワーフォールズ通りには、IRA「D」分隊、第二師団、ベルファスト旅団における志願兵や、当地やツインブルックにおいて死亡した戦争捕虜や市民犠牲者の戦没者記念広場がある。ツインブルックは西ベルファストとリズバーンの近接都市の間にある内陸地帯にある居住地区であり、そこには1981年のハンガーストライキで亡くなった人々と、それに追従したハンガーストライカーであるフランク・スタッグとマイケル・ゴーハンの記念碑がある。

#### <13>

ロイヤリズムについて言えば、アルスター義勇軍（UVF）<sup>15</sup>で亡くなった志願兵たちの記念碑は、その都市のいたるところ、特に東地区において見られる。UVFとアルスター防衛協会<sup>16</sup>の両方における多くのメンバーは、壁画やフルーツバンドの名前という形で、後年に名を残している。しかしながら、ロイヤリストの記憶には、その地位が準公式的であるという感覚を生むことを意図しているものもある。そのため、北ベルファストのマウント・バーノン地区のロイヤリストの復活の中には、2つの世界大戦でなくなった北アイルランド軍「と」、アイルランド共和国軍の両方の兵士の戦争の記憶がある。東ベルファストのロウワー・ニュータウンズ通りに2003年に作られた記念広場は、1970年にIRAによって

<sup>12</sup> ヴィクトリアクロス：英国軍及びコモンウェルス、旧英国領におけるもっとも高い地位の勲章。

<sup>13</sup> ユナイテッドアイリッシュマン：18世紀後半にフランス革命に刺激された愛国主義者によってつくられた結社。

<sup>14</sup> ファミン：19世紀半ば、ジャガイモの病気による不作が引き起こした大飢饉。これによって当時の人口800万人が半減したとされる。

<sup>15</sup> アルスター義勇軍：1966年設立、ロイヤリストの民兵組織。アイルランド共和国では非合法とされ、イギリス、アメリカにおいてはテロリスト集団と指定。

<sup>16</sup> アルスター防衛協会：1971年設立、ロイヤリストの民兵組織。アイルランド共和国、イギリスではテロリスト集団と指定。

殺されたプロテスタントであるジェームス・マッカーシーとロバート・ニールに敬意を表して名前が付けられている。ロイヤリストが多く住む西ベルファストのシャンキル記念広場は、その地域からやって来た 2 つの世界大戦で戦死した武装兵士と、1993 年にシャンキル通りで起きた IRA の爆破の犠牲者 9 人を追悼している。

#### <14>

ベルファストの記念空間に加えられたものの中で、近年もっとも驚くべきものは、スペイン内戦において共和国側に立って戦った国際旅団の 아일랜드人退役軍人を記念した、市の中心にあるセント・アンナ大聖堂の反対側にあるライターズ広場の彫刻である。この特殊な記念碑を見た人は、拡散した民兵による暴力が終わったのだということと、委任統治下における権力分担の形式が生まれたことによって、ある人々に自己反省の機会を放棄させ、また他の人々の歴史や対立について深く考えさせる機会であったということを考えるだろう。しかし、Shirlow and Murtagh(2006:181)が我々に想起させるように、「民兵による暴力の大半は中断したにもかかわらず、テリトリー分割とより厳しい民族セクト主義的コミュニティの創出は、恐怖と不信感が依然としてコミュニティの分裂を生もうとする欲望に規定されていることを意味している」。歴史的名所のような記念碑は、Jane Jacobs(1992:384)が書いているように、「主な舵取り役」なのである。しかし、その役割の中で、彼らは都市の物理的空間に我々を導くのみでなく、特別な隣人に付け加えられた社会的・文化的意味を読むように誘いもする(Bairner,2006)。記念碑が人々の住む場所から離れて建てられ、わざわざ訪れなければならないのとは異なり、Bachelard (1994:183)の言うところの「内面的な深遠さ」に特徴付けられるベルファストの記念碑は、人々の日々の経験の一部であり、当たり前のものであり認識されているかもしれないが、コミュニティの分離に対する欲求を強化する役割を果たすかもしれない。過去のスポーツの世界において、これほどまでこうした欲求が明確になったことはなかった。また、北アイルランドに新たなナショナルスタジアムを作り、その脇に ICTC を作ろうという計画に対する議論の文脈の中で、それはとてもよく理解されうる。

### ベルファストにおけるスポーツ・空間・アイデンティティ

#### <15>

都市における実際の風景、スポーツ、ナショナルな記憶の間の関係性について、アイルランドにおいてクロークパークほどより象徴的な組織はない。クロークパークは、ゲーリック・アスレティック・アソシエーション(GAA)<sup>17</sup>の本部であり、ゲーリックゲームス運動全体の精神的な本拠地である。実際、Carey (2004:41) が記しているように、「クロークパークは実際のゲームが行なわれているのと同じくらい、印象に深く残る場所である」。スタジアムそれ自体は GAA の最初のパトロンの一人であり、激しいナショナリストであったクローク・オブ・キャッシャル大司教に敬意を表して名づけられたものである。キュー

<sup>17</sup> GAA : 1884 年にアイルランドの民族ゲームを保護する目的でつくられた組織。クロークパークは、その専用スタジアム。ダブリン北部にあり、8 万人強を収容する。2007 年まで「外国スポーツ」であるラグビーやサッカーを禁止していた。ゲーリックフットボールやハーリングなどがある。



ザック・スタンドは、協会の創始者であるマイケル・キューザックの先駆的活動を記念したものであり、彼は GAA が「大草原の火事のように」(de Burca,2000:15)国を洗い流すだろうと、正確に予言した。もっと強烈なのは、マイケル・ホーガンを記念したホーガン・スタンドである。彼は、ゲーリックゲームスの歴史的資料の中で「血の日曜日」として知られる 1920 年 11 月 21 日日曜日に行なわれた、彼のカウンティであるティパレーリーとダブリンの試合の最中に、イギリス兵によって撃たれて死亡した [ゲーリック] フットボーラーである。1916 年のイースター蜂起の際に生まれた瓦礫がスタジアムのヒル 16 [スタンド席] に使用されていることは重大な意味を持っており、政治的闘争は「スタジアムの壁に埋め込まれている」(Furton and Bairner,2007:61)のである。ナショナリストや共和主義者の英雄にちなんでグラウンドやクラブに名前をつけることは GAA(Cronin,1998)の間で長い間広く広まっており、中でも西ベルファストにあるケースメントパークはそれが顕著であり、かつこの記事の主題からしてとても適切な事例である。アルスターのプロテスタント土地所有者家族の息子である、サー・ロジャー・ケースメントは、ナショナリストによるイースター蜂起<sup>18</sup>を延期させる目的で、1916 年 4 月 21 日に、ドイツ製の潜水艦でアイルランドに降り立った。しかし、English(2006:267)が語るように、彼の初期の努力によって、彼は「有名な反乱の背後にある戦闘を生む手段となってしまった」。ケースメントは、その年末に反逆を有罪だと認められた後に、ロンドンで絞首刑となった。しかしながら、北アイルランドの 6 つのカウンティの中でもっとも主要なゲーリックゲームの競技場の名前によって、彼の記憶は生き続ける。

#### <16>

北アイルランドにおいて、スポーツは長い間アイデンティティを生むものとして理解されてきた(Bairner,2002)。人がプレーし観戦するスポーツと、人がスポーツをするために選択する土地は、通常、ナショナルアイデンティティと社会空間の中心にコミュニティへの忠誠心があることを証明している。より一般的な身体活動全般に参加することもまた、恐怖や不信といった感情に大きく影響されている(Bairner and Shirlow,2003)。ケースメントパークや、ウィンザーパーク、オーヴァル、シービュー、ソリテュードといったアイルランドサッカーリーグ<sup>19</sup>のグラウンドのようなスポーツスタジアムは、ベルリンオリンピックスタジアムのようなハイスタンダードなアリーナでなければ印象には残らないが、ベルファストの文化的風景において極めて重要な記念碑となっている。月日を経る中で、そのサッカーグラウンドでプレーするチームの構成は変化するだろうが、対立を支える文化的近視によって、ゲームに参加できるファンの多くは制限され続けている(Lowenthal,1994)。同様のことは、ケースメントパークで行われるゲーリックフットボールやハーリングの試合を観に行った人にも言える。そのため、スポーツの試合に参加するということは、明白

<sup>18</sup> イースター蜂起 1916 年司令部が置かれた中央郵便局にてアイルランド共和国の独立を宣言した。しかしイギリス軍により制圧、義勇軍は降伏、指導者らが処刑された。その後のアイルランド共和国独立の契機となった。

<sup>19</sup> アイルランドサッカーリーグ: 北アイルランドのチームとダブリンのチームで行われていたサッカーリーグ。現在は、北アイルランドサッカー協会がアイルランドプレミアリーグとして運営されているが、一部チームが異なる。

に、少なくとも暗示的に、しばしば人々の政治的忠誠心をお互いに確認するということなのだ。

#### <17>

あらゆる側面において、北アイルランドにおいて最も論争を生んでいるスポーツ空間は、ウィンザーパークである。ウィンザーパークは都市の南部にあり、リンフィールドFC [北アイルランドのサッカーチーム] のみでなく、サッカー北アイルランド代表チームのホームスタジアムでもある。スタジアムは、ウィンザー・キャッスルという英国王家用住宅と同じ名前を持ち、リンフィールドクラブのバッジのようなイメージを持っており、英国における北アイルランドの正統的な地位を象徴している。比較的最近までベルファストの伝統的労働者階級のプロテスタントが住んでいた地区にあるという事実が、歴史的に見てアルスターユニオニズムがもっとも強いアイデンティティの素になっているクラブと、今日の組織よりも強く北アイルランドが独立した政治体であるという抵抗を示す「ナショナル」チームのホームスタジアムであるという事実に対して、より象徴的な地位を与えている。これらの様々な相互に関連する要因があるため、ウィンザーパークを「ナショナル」スタジアムにするという考えについて、多様なレベルで長年論争が起きていることは、驚くべきことではない。

### 新しいスタジアムの建設

#### <18>

2001年10月、北アイルランド行政諮問委員会（筆者がそのメンバーのうちの一人である）は、北アイルランドのサッカーの将来の検討を託されたのだが、マイケル・マクジンプシー下院議員、当時の北アイルランド文化・芸術・レジャー省大臣によって、行政部との先進的な権力分担において設置された。極めて多くの調査結果や提案のなかで、委員会は「フットボールの国際大会を開催するための、すべての基本的水準を満たすスポーツスタジアムは北アイルランドには存在しない」(Armstrong et al,2001,p73)と述べた。その結果、北アイルランド内で国際試合、主要なヨーロッパクラブの大会、アイリッシュカップ決勝[アイルランドリーグの選手権]のような国内主要大会といったフットボールの大会に対して、委員会は、多くのスタジアムがこれらの大会を開催することを承認するという考え方を支持した。委員会は「ナショナルスタジアムの建設可能性についての議論」(同)を意識していることを表明した。実際、1999年にはスポーツ・カウンシル北アイルランド支部の後援によってナショナルスタジアム実行委員会が設立された。しかし、それ以上の進歩はなかった。そのため、諮問委員会は以下のように述べた。「政府は、管理組織 [例えばアイルランドフットボール協会 (IFA : アイルランド共和国サッカー協会) のような] と協力して、ナショナルスタジアム建設のための安定的な委員会を設置して、不明確な状況を終わらせるために早く動くべきだ」(同)。表明されるべきより根源的な問題は、「スタジアムにおいてその他のスポーツも運営可能であるべきだ」(同)という問題である。こうして、政治家、管理組織、文化政治一般を規定する責を負う中央公務員の挑戦が始まった。

#### <19>

ほぼすべての委員会メンバーが同意したのは、新しいスタジアムは実務的な理由を有しているべきだという点であった。もし北アイルランドにおいて国際的なフットボールの大会を開催するのであれば、健康性や安全性に配慮したより厳しい国際ルールに応えるような設備を用意せねばならない。委員会メンバーの多くはまた、北アイルランド社会全体のより広い文脈に合った新スタジアムを作らねばならないと考えていた。アイルランド共和国を支持する代わりに「ナショナル」フットボールチームを応援したいと考えている北部ナショナリスト<sup>20</sup>はほとんどいないと、長年考えられてきた(Fulton,2005)。これに関して、多くの理由が考えられる。北アイルランドにおけるゲームを主催する、すべてではないにせよ多くの人々の間にユニオニスト的感情があること、北アイルランドのゲームがアルスターロイヤリストの歌と修辞学に伝統的に関係深いこと、試合前に英国のナショナル・アンセム（「ゴッド・セーブ・ザ・クイーン」）を歌うこと、アイルランド共和国チームのほうがより成功を収めており北アイルランドチームは相対的に低調なパフォーマンスであること、そして「北アイルランド」という言葉はタブーであり、ナショナリストはアイルランド島において受け入れがたい集団だという事実を反映していること、などがある。

#### <20>

それに加え、委員会のメンバーの何人かにとって、ウィンザーパークのネガティブなイメージのために、北アイルランドのゲームにナショナリストを引きつけるという希望は挫折せざるをえなかった。ウィンザーパークは、北アイルランド代表チームは現在ホームゲームを行っており、またアルスターユニオニズムを典型的に示しているアイリッシュリーグのクラブと本拠地を同じくし、そしてそのクラブと直接つながっているからである(Bairner and Shirlow,1998)。それでもなお、新しいスタジアムが完成すればナショナリストも北アイルランドを支持してくれるだろうと感じている委員会メンバーは、ウィンザーパークがリンフィールドのスタジアムだという事実によって、その他のアイリッシュリーグのクラブ、特に都市の東部をホームとしているグレントラン、グレナボン、ポルタダウンといったクラブのプロテスタントサポーターを遠ざけることになるだろうと主張している(Magee,2005 参照)。

#### <21>

スタジアム計画の段階では、英国政府は 42,500 もの観客席を持つスタジアムは、メイズ刑務所跡（1970年代から 2000年にかけて、ロイヤリストや共和主義者の囚人が集められたことで知られるロング・ケッシュ）に作られるのがもっとも適切だと考えていた(Hassan,2006;Bairner,2007)。現在のところ、関連するすべての政党が、原理的にはその戦略を支持している。しかしながら、建設地の選択が、様々な理由によって対立を生んでしまっている。それらの理由は、北アイルランドにおけるスポーツと政治の緊密な関係により光を当てるものである。

#### <22>

---

<sup>20</sup> 北部ナショナリスト：北アイルランド人で、共和国との統一を指示する人々。

政府がすでに土地を所有しており、そのためにベルファスト市の中心近くに新しいスタジアムを建設するための過剰なコストを恐れる必要がないという事実によって、大規模な測定がされることなく、政府の決定は促進されていた。しかしながら、市の 10 マイル [約 16 キロ] 離れた場所を選択したことは、スポーツとレジャーを都市再生と市民の支持につなげようとする戦略にとって、明らかに半端であった。その計画はまた、インフラを移動し、また土地開発戦略とベルファストメトロポリタン地区プランの両者を再びくり返すことに依存していた (Amalgamation of Official Northern Ireland Supporters' Clubs, 2006)。

#### <23>

刑務所跡地がボビー・サンズの死と 9 人の囚人を生んだ 1981 年の共和主義者によるハンガーストライキの土地であるというのみでなく、刑務所跡地それ自体が歴史上の困難を生んだという点で重要な土地であるという事実が、自体をより困難なものとした。新スタジアムの事前計画の中では、刑務所跡の H ブロックと呼ばれる場所だけはせめて残して欲しいという要望が受け入れられていた。これらの計画の中では、レストラン、オフィス、マルチスクリーンの映画館、ホテルに加えて、ハンガーストライキの種をまいた (O'Hearn, 2006) 古い H ブロック (H6) とともに ICTC を周辺に作ることに、ハンガーストライカーたちが死亡した刑務所病院もまた保存されることが主張されていた。北アイルランドの刑務所跡地である、ベルファスト北部にあるクルムリン・ロード刑務所は、様々な芸術活動の拠点として利用するために、修復されているところである。しかしながら、その刑務所の近年の歴史には、ほとんど議論の余地がない。それでもなお、メイズの将来に関する議論の中では、混乱による犠牲者の取扱いや、アイルランド教会 [プロテスタント] の前大主教であるロード・アームスによって作られた「過去に関する諮問グループ」によって調査されている平和と和解の問題について、幅広く討論されている。

#### <24>

メイズに関する議論の、唯一空間的側面に注目した重要な分析を通じて、Graham and McDowell (2007) は、主に ICTC に関する提案に焦点を当て、それが「ナショナル」スタジアムと同じ場所に位置しているということに全く持って言及していなかった。そのため、彼らは以下のように主張した。「メイズの将来に関する議論は IRA 暫定派<sup>21</sup>の政治的党派として派生したシン・フェイン党によって先導されている」(p.344)。彼らは、学問がスポーツの社会的意義を頻繁に過小評価している部分に光を当て、以下のような事実を無視している。つまりその事実とは、メイズ刑務所跡地を有効利用するためには、ウィンザーパークが「ナショナル」サッカースタジアムに置き換えられ、相対コストによって、政治家や市民ボランティアが、すでに公共が所有している土地を選択するような考えが一般的になることが重要である、という事実である。

#### <25>

Graham and McDowell は、ICTC について重要なポイントを指摘した。つまり、「文化遺産に関する論争が世界的に明らかになることを通じてメイズ刑務所跡地に関する理解が深ま

<sup>21</sup> IRA 暫定派：1969 年に主流となっていた穏健派から分離して結成された IRA の一派。

る（あるいは、それが破壊される）一方で、メイズ刑務所跡地は、北アイルランド、ベルファスト協定<sup>22</sup> [それによって権力を共有する行政部が生まれる]、分離主義を乗り越えた新しい社会のビジョンに関する話し合いといった特定の文脈の中で、特別な反響を得るのである」と正確に指摘したのだ。このことを念頭に置きながら、彼らは以下のように主張する。「メイズ刑務所に関する議論は、共和派／ナショナリスト－ロイヤリスト／ユニオニストの二元論、そしてそれらを支持する物語に関するプリズムを通じて起こっている」。そして「共和国主義者が、明らかにもっともその結果を重要視している」(p.350)と。実際、彼らは「未来における潜在的ステークホルダーのうち、共和国主義者の運動のみが、文化的遺産としてのメイズ刑務所跡地に焦点を当てている」と主張する。そのため、彼らは「メイズは、本質的にはゼロサムの文化遺産なのである」(p.363)と結論付けた。彼らは、「メイズ刑務所跡地は、共和国主義者による抵抗の物語によって特別な主張を表現している」のであり、「償いや和解の地としての潜在能力はほとんどない」(同)と信じている。

#### <26>

シン・フェイン党が、ICTCに関する議論を操作し、自らの役に立てようとしたことは、ほぼ議論の余地がない。少なくとも重要なことは、「メイズにハンガーストライカー―それはすでにもう起こってしまっており、シン・フェイン党によって促進された―に対する記念碑を用意すること」に対して反対した民主統一党（DUP）のサミー・ウィルソンのようなユニオニストの政治家によって、シン・フェイン党による議論への関与がどういうものとして認識されているかは重要である。これらのコメントは、現在の文化・芸術・レジャー省や、エドウィン・プーツ議員、民主統一党のメンバーに対して、間違いなく大きなプレッシャーとなっている。

#### <27>

これとは異なる見解は、北部ナショナリストにとってこの計画は特に重要だと信じる Hassan(2006)によって提出された。彼はこう述べる。「単純に、『ナショナル』スタジアムの建設には IFA が関与しているため、北アイルランドに新『ナショナル』スタジアムを作る運動を支持するのをやめる北部ナショナリストもいる」(p.341)。より一般的には、この計画で触れられている北アイルランドに「ナショナル」スタジアムを作るというアイデアが議論を巻き起こすだろうということを、彼は的確に記している。しかしながら、聖金曜日協定 [ベルファスト協定] 全般に関わる運動としてこの計画を支持することはナショナリストにとっての責任であるとする彼の主張は、以下のことを想定していない。すなわち、ユニオニストというよりナショナリストは、すでにどれだけ和平プロセスを支持し、また協定の精神がいかなる場合にも統合とは反対方向に作用するため、人々に対して自分たちがどこで人生を送りたいかを自分たちで決めるよう促すという事実をどれだけ支持しているのか、ということである (Bairner,2004)。それに加えて、Hassan(2006:341)が北部ナショナリストについて「彼らは前に進もうとし続けたいし、前に進もうとしたり新たな前進を生もうとするときには完全に不当な場合が多いが、そうした気の進まなさは 21 世

<sup>22</sup> ベルファスト協定：1998年4月10日（聖金曜日）英国政府とアイルランド政府において結ばれた北アイルランドをめぐる和平協定。聖金曜日合意とも呼ぶ。

紀初頭において妥当なものなのかどうかという問題が提起されるべきだ」と書いたとき、彼は、ユニオニストが長年新たな秩序を拒んでいたことや、もっと言うなら北アイルランドフットボールチームの支配的なプロテスタントやユニオニストのサポーターたちによって、長年スタジアム建設計画それ自体に批判があったことを見逃すところであった。実際、それは **GAA** が示した関心事というよりも、彼らによる批判であった。そしてその批判は、物質的・象徴的両側面から見たスタジアムの所有や、スタジアムを建設することによってひょっとしたら生じるかもしれない経済的利益といったより根源的な問題を提起している (**Bairner,2007**)。

<28>

この批判の中には、明らかに政治的でありながら、かつ **Graham and McDowell(2007)**によって提起された感情に共鳴するものもあった。**Amalgamation of Official Northern Ireland Supporters' Club(2006:25)**によると、「**SIB**（戦略的開発委員会）は、我々に対してスタジアムは中立的な空間であると保証しながらも、殉教の地として栄誉を与えられた土地が覗き趣味の観光客を引きつけるわけがないという主張を、信じるができなかった。論争的・対立的象徴主義に関心のない普通のスポーツファンにとって、スタジアムを素晴らしい場所と評価することはできないだろう」。実際、全くもって政治に無関心な北アイルランドのスポーツファンはほとんどいないだろうし、一つの派閥を喜ばせることは、他の派閥を怒らせることになるのだ。かつての囚人たち自身や、**ICTC** は、共和派による武力闘争の記憶を思い出すための重要な要素となるだろうが、世界的には北アイルランドサッカーチームのホームとして認識されるこのスタジアムが、同じ役割を果たすことは決してないだろう。実際、理念的な成果を達成しようとする政策決定者にとって、スタジアムを建設することは、コミュニティの特定のセクションの人々やかつての抵抗者にとって、感情的に訴えることのできる計画なのである。しかしながら、**Korkiakangas(2004:150)**が指摘しているように、「特定の空間に関するイメージ、希望、期待というものは、必ずしも常に片側の計画者と逆側の都市住民の間で合致するわけではない」。

## 結論

<29>

この議論から現われてくるものとは、**Zukin(1991:6)**が「経済と文化の風景」と呼んだものである。経済的に成長したスポーツ施設を、ある記憶を喚起する空間に用意するという提案は、明らかに『土地感覚』に関する市場実践の時空的影響」 (**Zukin,1991:6**)を示していた。**Gray(2007:203)**によると、「芸術や文化の政治学が美を越えた部分の価値を創造するというを示すために、芸術・文化の政治学を重視することは、政治システムの中でメジャーな開発の仕方となってきた」。スポーツ施設の建設が次第に特定の関心に焦点化していっていることに対する賛成あるいは反対することについては、議論が分かれるところだろう。**Gray(2007:212)**にとって、「芸術・文化政治に対して施設を建設するというアプローチは、何が作られ、そのセクター内でいかにして作られたのかという2つの点につ

いて、重要な影響をもたらしている」。もし政策決定者たちが、特定の目的、文化的計画（ここの「文化」は比較的狭い意味である）、スポーツに関わる人々といったものをあわせて考慮に入れていれば、その影響はより深刻なものになっているに違いない。

#### <30>

これらを踏まえると、**Graham and McDowell(2007)**は、メイズ刑務所跡地について議論しようとする際にスタジアム計画についておろかにも無視してしまったが、**ICTC** は、スポーツというタームにおいてのみ問題となる問題を、より複雑なものとしていると言える。スタジアムそれ自体は、今のところ、どのコミュニティの集合的記憶の一部にもなっていない。刑務所跡地に作られた博物館は、それとはまた別の問題である。**Bonnell and Simon(2007:65)**が指摘しているように、「博物館は、ある社会のメンバーに対して、あるものを自らの文化的遺産であると認識させるという潜在的な公共的役割を持つ、社会的記憶の組織としての機能を有している」。彼らが言うところの「“難しい”展示と深い知識との遭遇」について、彼らは以下のように主張する。「詳しい知識を授けてくれる可能性のある展示は、訪問者を『難しい』参加へと導く。その『難しい』参加とは、人々が持っている、過去の教訓の重要性を抑制するような考え方の妥当性に対して疑問を投げかけるような経験を伴うものである」(p.81)。

#### <31>

**Gillis(1994:3)**はこう主張する。「個人や集団のアイデンティティの持つ意味を持つものは、いわば時空を越えた同質性というものは、記憶によって支えられている。そして思い出されるものとは、前提としてのアイデンティティによって規定されるのだ」。ある社会では、ナショナルスタジアムとナショナルな記憶は、集合的記憶や集団のアイデンティティを生む手助けをしている。しかしながら、ベルリンやベルファストのように、分裂している、もしくはかつて分裂していた都市の場合、こうした部分が論争の種となる。何が記憶されるべきで、それがいかになされるべきかという問題に関して、対立するグループ同士では全く異なるアイデアが出されるが、**David Lowenthal(1994:53)**の言うように、「対立に加え、近視眼もまた、我々を悩ませるのだ」。他人の記憶に感情移入できなかつたり、特定のケースの場合、それらの記憶を考えないようにする必要性を感じることもある。

初めから、新スタジアムに関連した政策決定者の目的は、中立的なスポーツ（もしくはレジャー）空間を作ることであった。これ自体、すべてのスポーツや競争が本質的に内包している競争的性格という意味では、一種の矛盾である。またこうした競争的性格は、特に文化的アイデンティティの問題に巻き込まれたときに起こるものである。少なくとも、スタジアムが建設されたならば、北アイルランドのすべての公共空間同様、スタジアムもまた論争の種になることは間違いないだろう。その論争がどれだけ激しいものになるかは、政策決定者自身ではほとんどコントロールできないような要素に左右されるだろう。

（訳：本学大学院博士後期課程・笹生心太）